

福島被災猫レスキューの現場から——西井えり（青キニャンダラズ）

2011年3月11日の大震災と原発事故以来、置き去りになった動物たちの保護のために多くのボランティアが活動してきました。そのボランティアグループの一つである高田寺ニャンダラズの西井さんが、警戒区域内で何を見、何を感じたのか、その思いを語ります。

私個人が福島での動物レスキューを始めたのは2011年4月22日の福島原発警戒区域が設定された直後です。私がニャンダラズに合流するのは途中からですが、同じ目的を持ってあの場所にいたということ、いうまでもないことでした。

以前は動物愛護に疎かった自分ですら名前を聞いたことがある団体が、ベットを助けに行っていることがインターネットでわかったため、そのうち国が動いてくれるだろう、と信じこんでいました。結局そこまでの大きな動き、つまり福島の被災動物救済について世の中全体が理解・認識するというまでの動きはなかったのですが……。

しかし三年近く経った今は、私たちを見守って理解してくださる地元行政や公務員の方々が増え、とても動きやすくなり、ありがたく思っています。やっぱり時間が必要だったんだな、と今となってはそう思います。

2011年のあの頃に助けられなかったベットや家畜たちの悲惨な姿、泣き叫ぶ声はいまだに頭の中に生々しく残っていて、思い出すとつい、どうしてあの頃こうじゃなかったんだろう、あの頃こんなにスムーズに動けたのなら、あの時のあの子は死ななくて済んだのでは、といくら考えても仕方ないことが頭の中でエンドレスに流れてしまっています。

でもあの当時の体験があったからこそ、私は今の状況をとでもありがたく感じるのです。そんな私が動き始めた2011年4月頃からのことを、振り返ってみたいと思います。

まず、私たちがなぜ福島までレスキューに行くのか？ それはあの事故が人間の起こした災害だからです。人間のせいだからこそ暮らしていたベットや家畜たちがその犠牲になって、何の救済もなしに不条理な死

を迎えなければならぬのはおかしいと思います。人の起こした事故の責任は、私たち人間がとるべきです。人のそばに寄り添って生きていた動物たちに、人の意思で死を強要するような終息方法は間違っています。だから私たちは今も活動を続けています。

強制避難、そして警戒区域へ

三日で戻れるから、と言われ、車もベットも家畜も持ち出せなかった警戒区域の住民たち。

ほぼ無人になった警戒区域内の町は電気水道が止まり、人がいれば出る生ゴミも皆無、3〜4月はまだ冬で、あの辺りは餌になる虫や小動物もいません。町は心底冷えきり、野良猫ですら生きていくのが難しい環境でした。人に飼われていたベットや家畜が突然そんな状況に置かれて生きていけないでしょう。住民たちは三日で戻れると信じ、数日分のフードしか置いてきていません。

防犯のためベットを室内に入れて窓や玄関の鍵をきっちり締めて家をあとにした方、いつものように庭に犬を鎖で繋いだり、家畜を畜舎に入れ近隣に迷惑をかけないよう脱走対策をして避難してきた方。どれも誰に責められることのない普通の行動です。でも、これが人に飼われていた動物たちの明暗を大きく分けることになりました。

車もガソリンもなく、当時は人間だけでなく一杯だった避難場所。そこから戻って来れなかった住民たち。警戒区域設定後はすべての道がバリケードで閉ざされ、大きな道には警察の検問が設置され、山道にも監視カメラがあり、そこに近付くとパトカーが飛んで来て、空にはヘリも……。住民たちは大切な家族を家に残したまま、自分の家に帰ることすら許されなくなりました。

そこで住民たちの依頼を受け、敷地内捜索の許可をもらった私たちボランティアがなんとか監視の目をかわし、ペットを探しに行きました。

しかし、私がレスキュー参加した時点で、すでに住民たちが避難して一カ月は経っています。締め切られた家のドアを開けると、まだ息絶えたばかりじゃないかと思われる生々しいペットの遺体。何故かわからないけど、かなり長い期間腐敗もせず、ひからびる兆候もありませんでした。

残された動物たち

この当時、車内においても空間線量が200〜500マイクロシーベルトになることも珍しくなく、頻繁にガイガーカウンタが警告音を出していました。

家の中で繋がれて必死にそこから逃れようともがいた跡のあった犬。部屋にクツ

シヨンの綿が散乱してました。庭に面した鉄柵の中で抱きあっているかのような姿勢で死に絶えていたガリガリの2匹の犬。その柵の40〜50センチの高さが越えられなかったようです。

人のいない家を守ろうと、繋がれてもいないのに、食べる物もないのに敷地から出なかつた忠実な番犬。まるで生きてるみたいに横たわってました。

ある家の猫は、残された飼い主の衣類に頭を突っ込んで死んでいました。

ある家の玄關マットの真ん中には、帰らない家族を待っている姿勢で死んでいる猫がいました。

猫数匹を飼っていたある家は、完全に室内を締め切っていました。追い詰められての共食いがありました。先に死んだ子の体を食べ、なんとか生きようとしたんだと思います。結局全滅でした。私の飼い猫は4匹。とても仲良しのあの子たちが互いを食いあうなんて考えられません。どれだけ彼らは追い詰められていたんだろう、と考えると今も苦しくなります。

これは猫に限らず犬にもたくさん起きたことです。平常の状態じゃありません。本当の飢餓……。

案内の家屋室内、庭先には犬猫が漁った小麦粉や米の袋、牙穴の空いた調味料のフ

ラスチック容器が散乱し、食べられるものは何でも食べた跡がありました。どんなにがんばっても犬猫に開けられなかったのがタッパーと缶詰。散乱したタッパーには彼ら在必死に噛みつき引つ掻いた跡、缶詰には開けようと噛みついて逆に牙が刺さったままの状態のものなどがたくさん転がっていました。今も、若いのに牙の欠けた子が保護されます。この缶詰の犠牲者かもしれません。

家畜も悲惨でした。肉牛牛舎内は無人で掃除がされなくなつたために、自分たちの糞が体で半分以上も埋まり、身動きが取れなくなつた牛で溢れていました。餓死し腐っていく周りの仲間たちに囲まれ、自らも死を待つしかない悲惨な状況。肉牛だから、いずれ屠殺される生き物だからといってこんな目にあつてもいいのでしょうか？

乳牛牛舎には苦しうに鳴き叫ぶ牛たちの声が響きます。乳牛は、一日でも搾乳をしなかつたら乳が炎症を起こして、放置すれば死に至るそうです。ものすごい痛みを感じているのがよくわかりました。そういった家畜たちについては早く死なせてあげて！と心底願っていました。

その日始めて区域内に入った女の子が涙をポロポロ流しながら、外に生えてる雑草をかき集めて牛舎で鳴き続ける乳牛たちに

与えていたのを思い出します。そんなことをしても意味がないこと、長く生かすほうが残酷なことは彼女もわかっていたと思います……。

人を求めてさまようベツトたち

津波で倒壊した家屋や、地震で壊れてしまった家、または外を自由に出入りできた家などに住んでいたたり、繋がっていた鎖を自力で壊して自由になれた子たちは、ひとまず死を逃れました。しかし人がいなければ町には食べる物も暖かい場所も生ごみもありません。

警戒区域圏内には国道6号線と呼ばれる道路が横断しています。しかし当時、住民たちですら入れない圏内、一般車両など走っていません。限られた許可車両のみが走行し、道路は常に監視されていました。覆面パトカーも走っています。もし警察に止められれば臨時の警察署に連行されました。3月11日以降、盗難が頻発していたので仕方ないことです。中にはボランティアに扮して捕獲器を車に積んだ泥棒もいたそうです。

私たちが当時本当はそこに入るのを許されておらず、そのメイン道路の途中で停車することなど絶対にできませんでした。しかし、無人の町にさまようベツトたちは唯一、人

がいた頃の音がするその道路に向かいます。食べ物を求めてだったかもしれません。

通るたびに見かけたのは、いつもその道路脇で飼い主を待っている首輪をした犬と白猫のペア。白猫はしばらくして許可車両に轢かれて死んでしまいました。別の町ではこんな光景も見かけました。その道路に面したコンビニ前にパトカーを止め、通る車を監視する警察官、そして久しぶりに人を見つめそうにその警官の横に寄り添う犬。でも警察の方々は職務規則があるため、その子たちを連れて外に出ることはできません。時間が来れば置いていかれるのです。私たちはそんな光景を見るたびに悲しくて悔しくて仕方ありませんでした。脇道に入ってくれば、いくらでも助けてあげることができるのに、どうしてそんなところに！と。私たちにできることは、なるべくその近くに「どうか見つけて」と願いながらフードを置くことだけでした。

この時期は監視が厳しかったので圏内に入れるボランティアも少なく、その一人一人が定期的に動けるはずもありません。全長40キロにもなるこの広い地域を網羅するのはとても難しいことでした。

監視が厳しくて行けなかった場所も多々ありました。それでも命が繋がるようにと願い、世界中から寄付していただいたフー

ドを、点在する彼らが食べられるように毎週必死で配りました。

その時期、依頼ベツトの捜索に出ている仲間と別行動で、保護した犬猫と共に真つ暗闇の無人の住宅地に一人でいたこともありました。本当の暗闇で無音です。明かりは自分の持っているライトだけ。その時は依頼主の家の縁側やお庭で休ませていただきました。家の中は地震で散乱した物で溢れていました。それでも震災前のように容易に想像できる場所もありました。

この家の猫ちゃんはこの出窓に用意されたこの猫ベツドに寝そべって、暖かい家の中からのんびり外を眺めてたんだろなあ。それなのに突然人がいなくなり、真つ暗闇になり、家の中も凍えるほど冷えきって、飼い主が置いていったわずかな食べ物もあつという間になくなっていく。どんなに鳴いても叫んでも誰も帰ってこない。めちゃくちゃ怖かっただろう、寂しかっただろう、お腹がすいただろう、訳がわからなかっただろう……。思わず自分の飼い猫に置き換えて想像して、暗闇の中、一人で泣いてしまったこともありました。

灼熱、飢え、暗闇

6月になると食料になる生き物が出てきはじめ、生き残った子たちの命を繋ぎまし

た。その頃から住民たちの一時帰宅が始まりました。

滞在時間は昼間の数時間、持って出られるのは小さなビニール袋一つ分だけ。当然ベット、車は持ち出し不可です。なんとか過酷な冬を生き抜き、無人の家で待つていた子たちもいました。しかし住民たちは連れて帰ることができません。多くの避難所はベット不可のままです。持ってきたありったけのフードを置いて家を出るしかありませんでした。

とある家で待つていた猫は飼い主に連れて行ってもらえると思つていたのか、飼い主さんの乗った一時帰宅のバスを鳴きながら追いかけて来ました。それでもバスは止まらず、その飼い主さんが自分の猫の姿を見たのはそれが最後でした。

捜索依頼を受けその家に行けたのはその一ヵ月後。しかしその後何ヵ月も、どんなに探しても見つからず、今もその地域に行くすべてのボランティアが協力し、捜索を続けています。飼い主さんからの依頼電話の後ろで、お子さんがその猫の名前を呼んで泣いていたのが印象に残っています。

夏になると人のいない土地はこうも濁くのかというほどの灼熱地獄に変わりました。全世帯水道が止まっているので、車に

積めるだけ水を積み、ボランティア同士で園内の湧き水の情報を交換し、必死で給水にあたりました。でも、あの広さにわずかな人数です。焼け石に水だったのでしょう。酷い渴きは冬を生き抜き弱つていた動物たちに追い討ちをかけたました。この時期にたくさんの子が死に絶えました。

また、限界まで痩せ細つた上、皮膚病になつた動物も増えました。

たくさんの牛たちが餓死した牛舎。そこに住み着いた元ベットの犬猫たち。腐つて時間が経ち乾いた牛の肉を食べて命を繋いでいました。平常ではとても食べられるものじゃありません。彼らの寝床でそれを見つけるたびに、「ごめん、ごめん」と呟きました。私たちはそんな荒廃した現場で保護給餌を続けていて、少しマヒしていいところもあります。

明かりは太陽だけで夜には真の暗闇になつた当時の20キロ圏内。初めて夜中に園外に出て外の町の夜景が見えたとき、「あ、福島にも明かりがあつたのか」と当たり前のことに妙な感想を持つたのを覚えています。実はニャンダラーズ1号・佐藤洋平氏は福島島の出身で実家は郡山市にあります。子供の頃夏休みによく遊びにきた当時の園内のピーチのようすや商店街での思い出を、給餌保護活動中に話してくれました。

すっかり荒れてしまつたその町々ですが、事故前は子供たちが自転車でも走り回り、緑溢れる歩道では犬の散歩をする人、家族連れの良いお客で賑わつた商店街があつたのだな、と縁もゆかりもない自分が思うのですから、年々荒れていく園内を見続けながら、子供時代を過ごした彼はほつと複雑な思いで活動していると思います。

2011年秋頃から、正式な許可証さえあればなんとか園内に入れるようになってきました。国道6号線に停車しても、警察官の職務質問にきちんと答えれば、それで済むようになりました。自らの生活がやつと落ち着いてきた住民たちも自分のベットを探す余裕ができて、保護した被災ベットと飼い主さんとの再会も増えてきました。しかし動物を飼える環境にある方々はわずかです。今もベット不可の仮設住宅や借り上げ住宅に暮らす人が大半。しかし彼らには置いてきてしまつたという負い目があるのでしよう。飼えないけれど一目だけでも元気な姿を見て謝りたい、という方がたくさんいました。また、新しい家族の元にいるベットに会いに上京する方々もたくさんいました。

2011年冬からは、現地に入るボランティアも増え、現在はボランティア同士の

協力関係もでき、安定的に給餌ができるようになりました。と言っても刻々と事情の変わる圏内。私たち県外ボランティアはいつまで活動ができるのかわからないという不安が常にあります。だから現在、圏内の住民の中からもベットの保護活動をされる方々が現れ、とても心強く思っています。命を見捨てない世の中を願って

日本は子供の数よりベットの数が多いいベット大国です。そしてベットとは、家庭に笑いや温もりを運んでくれる大切な家族です。なのに、こういった方が一の時にはベットは国にとっては物であり、守る対象にはないのです。

福島では避難集会所にベットと逃げても、ベットはヘリにもバスにも乗せてもらえません。被災を生き抜いたのに彼らは置き去りにされました。不条理だと思います。でもやはりそれは一公務員である現場の人々にはどうにもできない決まり事なんです。国の、上のほうの方々が「ベットも家畜も助けるんだー」と決めてくれれば、震災時、自衛隊も警察も役場の方々も、私たち市民にとってもすごく心強い味方になります。例えばあなたがベットを飼っていないなくても、最も弱い立場にある伴侶動物までも守ってくれる国、頼もしいと思

ませんか？

2013年、環境省がベット同伴避難の決まりを作ってくれましたが、避難場所設置は各市町村に任ざれています。もともと国が綿密に市町村と連携して、被災者とは別にベットも避難できる場所を作るようにしなければいけないと思います。そうしなければまた同じことが起こります。

実際、台風や土砂崩れで被災者が避難している映像がニュースで流れますが、彼らのベットはその時どこにいたのでしょか。ベットを置いてくる、それだけでも被災者の心を重たいものが覆います。

福島には、まだ助けを待っているベットたちがたくさん残されています。何一つ終わっていません。

次に大災害が起きたとき、福島のように見捨てられる命や無用の涙を流す人がいなくなることを願います。



補償給にかかった猫に話しかける西井さん

中学受験の国語論

監修・若尾直人（和ゼミナール校長）

著者・武本貴志（和ゼミナール教員）

国語専科のカリスマ国語塾「和（わかお）」ゼミナールを引継いだ著者が、読解力の解法を紹介するのみならず、国語という科目の成り立ちから考え、国語の力とは何かということについて語ります。
1,400円＋税 ISBN 4-97615-134-2
発行 座右宝刊行会／発売 株式会社経研

未来へ伝えたい 日本の伝統料理（全6巻）

監修・小泉武夫／著者・後藤真樹

編集・座右宝刊行会

日本全国各地の家庭に今も伝わる郷土の味を紹介。小学校高学年以上を対象としています。高校・大学の図書館へも導入されています。日本の食文化を次代へ繋ぐシリーズ。
各巻定価800円＋税／揃定価4,800円＋税
(ISBN 978-4-980800-1 小嶋書店刊)

筆であそぼう書道入門（全4巻）

監修・角田孝子／佐々木和重

指導・角田孝子／佐々木和重

書って楽しい一筆で書くって楽しい一巻の奥深い魅力を知る、感じる、楽しむシリーズ。小学校高学年以上を対象とした今までのない書道入門書。また、カラー図版で書の歴史を視覚する第4巻は、一般向けの書の講座でもご利用いただいています。

各巻定価3,200円＋税／揃定価12,800円＋税
(ISBN 978-4-338-27400-5 小嶋書店刊)